

# 試験研究成果普及情報

部門	林業	対象	普及
課題名：サンプスギ間伐手遅れ林分の管理指針			
[要約]間伐が遅れたためにモヤシ状となり、気象害に弱くなったサンプスギ林を管理するための指針を作成した。管理の基準には形状比(樹高と胸高直径の比)を用い、気象害を受ける危険性が高い場合には皆伐、再造林を含めた管理を指針に加えた。			
キーワード(専門区分) 育林 (研究対象) 育林-間伐 (フリーキーワード) サンプスギ, 間伐, 形状比, 気象害			
実施機関名 (主査)森林研究センター 環境機能研究室 (協力機関) (実施期間)2000~2002年度			

## [目的及び背景]

サンプスギは挿し木品種(クローン)であるため、実生スギと違って各個体の成長差が少なく、個体間の競争による自然淘汰が発生しにくい。このため、間伐が遅れた場合には形状比が高いモヤシ状の共倒れ型林分となりやすい。そこで、気象害をできる限り避けるための管理指針として、形状比を基準とした「サンプスギ間伐手遅れ林分の管理指針」を作成した。

## [成果内容]

管理指針の内容は以下のとおり。

- 生産目標に達し主伐が可能(収穫が可能)な場合は、スギ非赤枯性溝腐病の被害拡大、伐期の長期化による気象害の危険性等を考慮し、皆伐し再造林を行うことが望ましい。
- 生産目標に達していない場合、または経営上の理由により伐期を長期化する場合は、気象害を避けるために形状比に応じた管理を行う。
- 形状比が101以上で「危険」と判断される場合は、皆伐し再造林することが望ましい。また、皆伐ができない場合には、間伐率を10%程度に抑え、2~3年ごとに間伐を繰り返し、形状比の高い個体から伐採していく。ただし、形状比の回復には長期間を要し、その間に気象害を受ける危険性が非常に高い。
- 地位および林齢に対応した形状比から「注意」と判断される場合は、間伐には注意が必要であり、実施する場合には、間伐率を10%程度に抑え、2~3年ごとに間伐を繰り返し、形状比の高い個体から伐採していく。なお、個々の樹冠が小さくなっている林分においては、直径成長の低下により形状比の回復に長期間を要するため、その間に気象害を受ける危険性が高い。
- 形状比から「通常」と判断される場合は、サンプスギ林分収穫表を基準に通常の間伐を実施する。
- スギ非赤枯性溝腐病対策として、以下のa, b, cのいずれかにあてはまる場合には皆伐とすることが望ましい。  
a 主伐可能, b 被害率70%以上, c 形状比101以上
- 形状比が「危険」、「注意」の状態において間伐を行う場合には、冠雪害の心配がなくなった春先に行う。
- 過去に気象害を受けた林分については、地形等の条件により再び気象害を受ける可能性があるため、より形状比を低く管理する。
- 気象害を避けるため、林縁については防風効果を低下させないよう管理する。

## [留意事項]

管理指針は目安であり、実際の管理方法は立木の成長状況等を考慮して決定する。

## [普及対象地域]

県下全域

## [行政上の措置]

## [普及状況]

## [成果の概要]

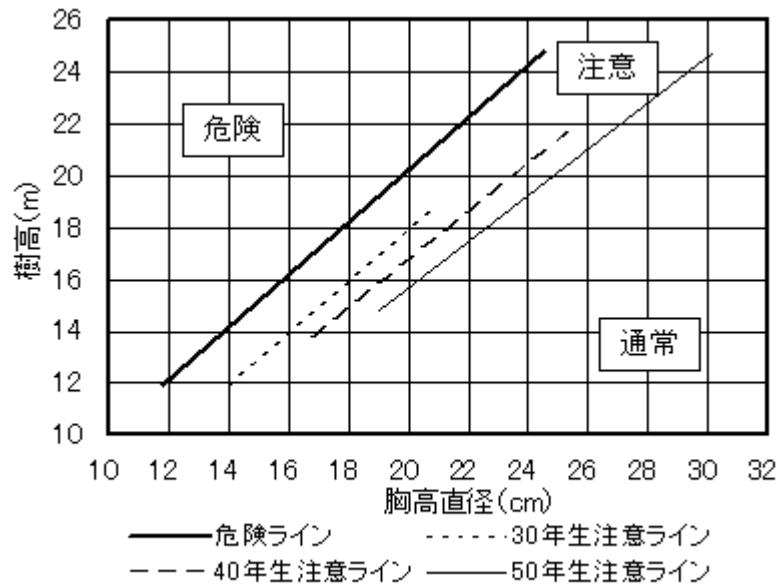


図-1 各林齢における危険，注意，通常の範囲

胸高直径と樹高からみた各林齢における「危険」、「注意」、「通常」の範囲を図-1に示した。各区分における管理方法については[成果内容]に記載したとおりである。

[発表及び関連文献]

福島成樹(2003)サンプスギ間伐手遅れ林分の管理指針，平成14年度試験研究成果発表会資料林業部門，15-19